

瑞浪市というバトン

すてきなプレゼンでした。生徒たちは真剣に、かつ、心を弾ませて見ていたようでした。地方自治について教科書の内容を通り一遍学ぶのではなく、自分たちのふるさとである瑞浪市を通して具体的に学んだことで、彼らの興味関心は大きく刺激されたことでしょう。

若い人たちに市政に関心をもってもらおうと、市内三中学校の三年生を対象に、瑞浪市議会議員の皆さんが、自分たちが今取り組んでいることをリモートで説明してくださいました。瑞浪市を「皆が住みたいと思う町」にするために、具体的にどんな取り組みがなされているかを生徒たちは初めて知ったようでした。

生徒たちの反応が最も顕著だったのが、「きなあた瑞浪」に併設されるBBQ場の建設と、瑞浪駅周辺の再開発に代表される「瑞浪市の未来像」の説明の時でした。見慣れた風景が、今後のどのようにな変わっていくか、どれくらい魅力的になっていくかが、彼らの興味関心を集めたようです。

瑞浪市の将来に心弾ませる内容がぎゅっしり詰まったプレゼンでしたが、それを視聴した北中生、いや、瑞浪市内の中学生には興味関心をもつレベルでは終わらないでほしいと思いました。市議会議員の皆さんが、なぜ市内の中学三年生にアプローチしてきてくださったのかを、深く考えてほしいのです。

一年国語の教科書に『大人になれなかった弟たちに……』という物語がありました。原作は絵本でしたね。作者の米倉齊加年氏（平成二十六年没）は、どうして絵本にしたのでしょうか。

幼い子供たちでも読める絵本にした理由……託したかったからだと私は信じています。平和な世界をこれからの若者につくってほしい。戦争が二度と起こらない世の中にしてほしい。それが今は亡き米倉氏の絵本に込めた熱い思いなのです。

今回のプレゼンにも同じものを感じました。プレゼンの最後に、議員の皆さんの思いが表れていました。「瑞浪市の未来を担うみなさん、自分の周りの身近な課題、市が実施している事業に関心をもってください」という部分から、瑞浪市というバトンをもって全力疾走で駆け寄ってくる市会議員の方々の姿が目

に浮かんできます。

実際のリレーなら、バトンを受け取ったアンカーがゴールテープを切る姿を見て、走者全員で喜びを分かち合うことができます。しかし、地方自治では、ゴールテープを切ってもバトンを運んできた人たち全員が喜び合えるということはありません。だからこそ、その分強い思いが、瑞浪市というバトンには込められているのです。

（十月六日 記）

